

日本におけるドイツ映画の公開

—1910年代を対象にして—

山本知佳

1. 研究の背景と目的

従来における日本におけるドイツ映画史研究は、主に映画作品そのものに多く関心を向け、映像的価値や技術的側面の分析、ならびにその社会状況の分析・検討を行ってきた。これまで研究対象とされてきたのは、戦前期においては、1920年代に盛り上がりを見せた表現主義的傾向の強い作品、戦後期においては、1960年代に開始されるニュー・ジャーマン・シネマの作品等であった。またこれらに関する欧米の主要な文献は、断片的なものから総合的なものまで、邦訳され多くが紹介されている。これらは多種多様な視点から、ドイツ映画を捉えているが、そこには日本社会と関連付けて捉える研究は極めて少ない。例えば、戦前期の日本においては、現在の「映画」と呼ばれる以前の「活動写真」の時期から、多くの外国映画は娯楽であると同時に模倣すべき対象であり、とりわけドイツ映画はその独自の芸術的価値を評価されて、大衆娯楽として親しまれたアメリカ映画とは対立的な構図の中で取り扱われるという特別な位置を保持してきた。それにもかかわらず、例えば、『カリガリ博士』(*Das Kabinett des Doktor Caligari*, 1920)のような表現主義作品の影響を取扱った研究を除けば、当時の映画界の動向や各地での実際の興行、さらには観客との関わりに関心を向けるような、日本社会におけるドイツ映画の受容に焦点を当てた研究は非常に少ない¹⁾。ドイツ文化は、近代化以来、日本においては早い段階から紹介・受容されており、政治・経済分野同様に「学ぶべき対象」として捉えられてきたが、映画に関しては、たとえ作品自体の芸術的側面が広く認識されていたとしても、一般的には「娯楽」と見做し、その関わりを十分に分析・検討する対象として取り扱ってこなかったのである。

この状況に鑑み、本稿は、戦前期の日独関係、とりわけ日本側のドイツに対する関心の在り方を捉えるための手掛かりの一つとして、映画作品を通して、当時の日本社会が、ドイツに対してどのようなイメージを抱いていたかを明らかにすることを意図する研究の一環に位置づけるものである。この時期の日本において、実際に公開された映画作品の取り扱いを通して、認識の変遷を把握・分析することで、映画という当時広く浸透してゆく新たな大衆文化の視点をもとに、日独関係を捉え直そうと試みるものである。その手始めとして、本稿にお

いては、ドイツ映画の公開が開始されはじめた1910年代の初期の作品群の在り方と日本社会との関わりに注目する。実際に、この時期にどのようなジャンルの作品がいつ、どこで公開されたかを確認し、それらがどのように批評されたのか、それらにはどのような傾向があったのか、これらを踏まえたうえでドイツ映画に対してどのような認識が形成されていたのかを他の外国映画の動向と社会状況の変化とともに捉えることが本論文の目的である。

2. 対象資料と「ドイツ映画」の定義

作品批評の専門性を重視することから『フィルム/キネマ・レコード』や『活動写真雑誌』、『活動の世界』、『活動評論』等、主に映画専門誌を対象資料とした。また、公開作品を把握するために、近年、世界映画史研究会が編纂した『舶来キネマ作品辞典—日本で戦前に上映された外国映画一覧—』（以下『舶来キネマ辞典』）を、映画常設館の公開情報の確認のために『都新聞』、『東京朝日新聞』や『横濱貿易新報』をそれぞれ参考とした。

また、本稿においては、「ドイツ映画」として取り扱う作品を、当時ドイツの映画会社の製作かどうかで判断の基準としたい。多国籍に編成されつつある今日の映画産業においては、監督や俳優の国籍、または使用言語、撮影地、製作会社等、これらの何を以てして「ドイツ映画」とするのか、その定義は容易には示せないが、本稿においては、明瞭に、当時のドイツの映画会社によって製作された作品、参考資料に「ドイツ製」と記載されている作品を「ドイツ映画」と定義し、調査・検討の対象とする。

3. ドイツ映画公開のはじまり

日本映画史家の田中純一郎（1902-1989）の『日本映画発達史Ⅰ』によれば、日本における「活動写真」の始まりは、1896年（明治29年）11月、トーマス・アルバ・エジソン（Thomas Alva Edison 1847-1931）が発明したキネトスコープ（Kinetoscope）という映写機の輸入・公開からである²⁾。このキネトスコープは覗き眼鏡が付属した箱型の形状をしており、その中で回転するフィルムを見るというものである。現在、一般的に認識されている、スクリーンに映写し、それを一度に大勢が鑑賞することができる、いわゆる「映画」の形態とは異なるものである。翌1897年（明治30年）にシネマトグラフ（Cinématographe）とヴァイタスコープ（Vitascope）の登場を経て、公開形態は徐々に現在に近いものとなり、これらと同時期に製作と興行が開始されていく。

日本における最初期の外国映画は、主にヨーロッパ製の短い風景映像やトリック映画であった。その中でもおそらく一番有名な作品は、1905年（明治38年）公開のジョルジュ・メリエス（Marie Georges Jean Méliès, 1861-1938）の『月世界旅行』（*Le Voyage dans la Lune*, 1902）である。著名な文芸作品を題材とした作品も公開され、徐々に増加していった³⁾。フランスの犯罪映画『ジゴマ』（*Zigomar*, 1911）は、1911年（明治44年）に公開され、外国映画で初の全国的規模での爆発的な流行になり社会現象を巻き起こした。一方では、グスタフ・

フロベール (Gustave Flaubert, 1821-1880) の『サラムボー』 (*Salambo*, 1911), アレクサンドル・デュマ・フィス (Alexandre Dumas fils, 1824-1895) の『椿姫』 (*La Dame aux amélias*, 1912) 等の著名な文芸作品や歴史を題材とした作品が公開され話題となっていた⁴⁾。

このような状況で日本におけるドイツ映画はいつ頃登場したのか。現在確認できる最古の映画史料の一つとして、1909年(明治42年)6月から1911年(明治44年)11月迄に発行された『活動寫眞界』が挙げられるが、これには当時のドイツ帝国に関する知識等の記述が僅かに散見されるだけで、明確にドイツ製の映画作品の公開を示すような目立った記述は見当たらない。というのも、ドイツにおいては、1914年(大正3年)の第一次世界大戦以前に国内で公開された作品の大部分は、フランスやイタリア等の外国作品であり、国産映画の市場で占める割合は10～20%に過ぎなかったからである⁵⁾。その為、この時期日本におけるドイツ映画の公開が顕著ではないことは特に不思議ではない。

その中でもようやく、明確にドイツ製の映画作品として公開記録を確認できるのは、1913年(大正2年)10月から発行された『フィルム・レコード』(のちに『キネマ・レコード』と改名)の主要劇場の公開記録とその作品のあらすじ紹介・短評の記述からである⁶⁾。また、『舶来キネマ辞典』においても、ドイツ製の映画作品の登場は、同様に1913年(大正2年)と確認できる⁷⁾。

4. 各年公開作品数と代表的な作品、主な社会背景

この『舶来キネマ辞典』に掲載されている「ドイツ製」映画作品及び当時のドイツの映画会社と確認できる社名の映画作品を抜粋し、主要な映画専門誌や当時の新聞広告等の記載との相違がないか確認した。またこれらを参考にして、『舶来キネマ辞典』が記載していない該当作品の公開記録を新たに加えたものを、本稿末に【日本において公開されたドイツ映画作品一覧表】(以下【一覧表】)として掲載した。この【一覧表】で取り上げたのは、「公開作品」、「原題」、「ジャンル」、「封切年」、「封切日」、「封切場所」、「製作会社」の7項目であるが、それぞれ次のような点に注意した。公開作品については、例えば『憲兵モエビウス』【一覧表35】のように、本来「メビウス」と表記される箇所、または旧字体を使用した箇所があるが、これらを修正せず、当時日本公開時のタイトルをそのまま用いた。加えて、作品が異なるタイトルで複数の常設館で公開されていた場合には、その使用されたタイトルを併記した。原題については、ドイツ語ではなくほぼ英語表記であるが、それは当時の日本への映画作品の輸入が、主にイギリス・ロンドンの市場を経由して行われていたことに関係している。また、この他の「ジャンル」、「封切日」、「封切場所」等の項目も、『舶来キネマ辞典』を基礎としているが、公開情報については、より詳細な記述が多く記載されている『都新聞』、『横濱貿易新報』の内容を優先した。

このようにして作成した【一覧表】からは、1913年(大正2年)から1919年(大正8年)までのこの期間に公開されたドイツ映画は、全体で少なくとも260作品確認できた。下記の

図1は、このような公開数の推移を示すもので、【一覧表】を参照しながら、専門誌や新聞において話題にされた各年の代表的な作品やこの時期の社会背景を見ていきたい。なお、本稿で一覧番号を示す際には、作品名の後で【番号】のように記していく。

4. 1. 各年公開作品数と代表的な作品

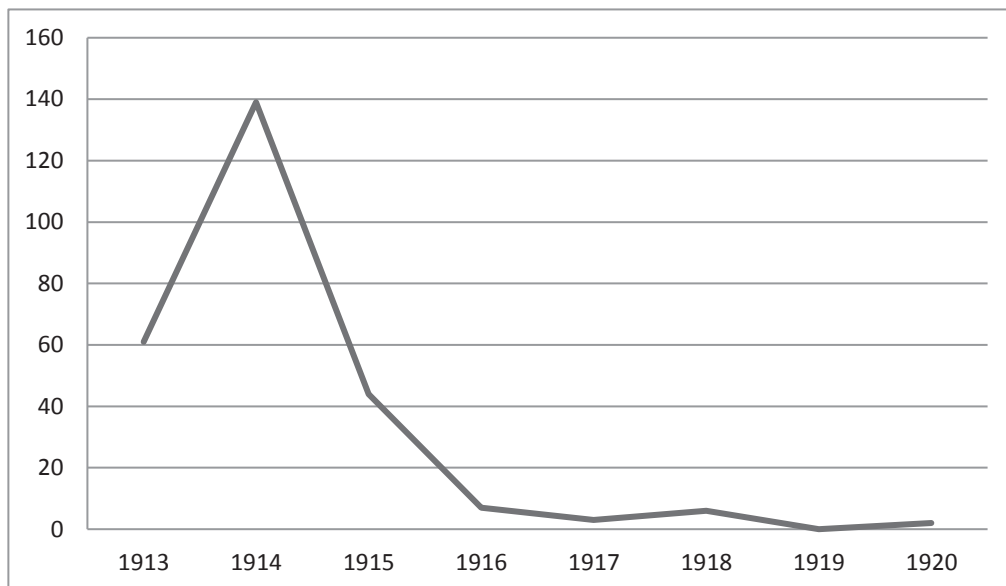


図1 日本におけるドイツ映画の公開数の推移

注) 『舶来キネマ辞典』『都新聞』『横浜貿易新報』『フィルム・レコード』『キネマ・レコード』よりドイツ製映画を抜粋し作成。縦軸は公開本数を、横軸は公開年度を示す。

これによれば、1913年（大正2年）の公開件数は、全体で61件あり、映画専門誌が取り上げた代表的な作品として『憲兵モエビウス』【35】がある。大半の作品がジャンル不明であるがその中でも、喜劇と悲劇、活劇が挙げられる。

1914年（大正3年）の公開件数は、前年より飛躍的に伸びている。全体で139件あり、喜劇や悲劇と共に探偵物や現在のアクションドラマに相当する探偵活劇が目立っている。風景記録など文化的・教育的要素のある作品も加わり、ドイツ映画の全体的な層の厚さを示している。代表的な作品も、『愛の叫び（國なき人）』【67】、『プラークの大學生』【79】、『真夏の夜の夢』【116】、『ブラウン探偵』シリーズ【57, 64】等と増えている。

1915年（大正4年）の公開件数は、全体で44件あり、前年より100件近く減少している。半数がジャンル不明であるが、活劇、探偵劇は前年同様比較的多い。代表的な作品として、『名馬』【202】などの探偵劇がある。

1916年（大正5年）の公開件数は、全体で7件あり、前年より更に減少傾向にある。代表的な作品としての『活人形（人形の家）』【247】、『ゴーレム』【250】がある。

1917年（大正6年）の公開件数は、全体で3件あり、極めて少なく、前年の半分以下に減少している。この年以降の代表的な作品は特にない。1918年（大正7年）の公開件数は、全体で6件あり、前年より僅かではあるが増加している。1919年（大正8年）の公開件数は、全体で0件である。映画専門誌の誌面にも作品の公開記録は見当たらない。

これらのことから目立った点は2点ある。1点目は、公開作品が1913年（大正2年）から翌1914年（大正3年）まで急激に増加している点である。これは、ドイツ本国での製作本数の増加⁸⁾と同時に、当時の作品が日本の興行者や観客から、その作品の内容や技術において、他の外国映画の中から際立って、その存在を明確に意識され始めたことに起因すると考えてもよいだろう。『フィルム・レコード』にはこれに関連する以下の記事が3点掲載されている。始めに、『フィルム・レコード』第四号（1913年11月24日発行）において、JCA同人という人物が『憲モエビウス_[ママ]』に就いて」と題して以下のように述べている。

『憲兵モエビウス』(Gendarme Moebius)は獨逸において小説家及劇作家とし名あるフィクトル、ブウィトゲン氏 (Victor Blüthgen) によつて書かれた活動劇ですべてが自然的な自由な描寫に成つてゐて活動寫眞の藝術的の眞價を表はしてゐる。(中略) 益々獨逸フィルムに對し吾々は十分眼を開いて注意すべき時季が來たのである。⁹⁾

更にJCA同人は、監督マックス・ラインハルト (Max Reinhardt, 1873-1943) や俳優達の「自由なわざとらしくない」演技を評価している。製作会社のビオスコープを、当時世界の映画市場を席卷する勢いのあったフランスのパテ社 (Pathé) にたとえ、今後より多くのドイツ映画の公開を期待するとして、更に上記の以外に、ルートヴィヒ・ガングホーファー (Ludwig Ganghofer, 1855-1920)、ハンス・ハインツ・エーヴェルス (Hans Heinz Ewers, 1871-1943)、アドルフ・パウル (Adolf Paul, 1863-1943) 有望な脚本家達を列挙している¹⁰⁾。この他にも同號では、公開作品の紹介や短評以外に、ドイツの映画会社やその販売代理店に関しても初めて取り上げている。

次いで、翌年の『キネマ・レコード』第六号（1914年1月1日発行）において小川誠耳という人物が「先年度の活動寫眞界雜感」と題して以下のように述べている。

大正二年度は獨逸の寫眞が非常に輸入されました。そして華やかなロマンチックなものに許りあこがれてゐた我等の頭に實質的な重苦しい、しかしより實在性のある意味の深い劇を数多く見せてくれました。「もつと眞面目な心で活動寫眞を見ろ。」—そう獨逸の寫眞が教へてくれました。それ等の寫眞は直ちに我等の心にせまくなくては_[ママ] ゐませんでした。見たあとで只笑つた許りでは濟されない様なものでした。そして之れ等を演ずる俳優は獨逸の有名な俳優でした。アスタニールセン。ルツエ、ホエフリッヒ。フランツ、モレナー等云ふ俳優を我等は接する事が出来ました¹¹⁾

小川は、これらの作品から何らかの確かな手応えを感じたように、「只笑つた許りでは済まされない様なもの」と述べているのは、これらの作品を、華麗さや滑稽さを提供する従来の映画に多く見られるような一過性の「娯楽」とは一線を画した、真に迫るような人生の不確かさと悲哀を訴えかける深刻さを「芸術」として捉えつつあったからである。

また、『キネマ・レコード』第十号（1914年4月10日発行）においては、同誌を「獨逸號」とし、詳細なドイツ国内の映画会社の基本情報と製作傾向、公開作品の紹介・解説などを掲載している。中でも後に純粋映画劇運動を展開することになる歸山教正（1893-1964）は、「獨逸フィルム現在の現在及将来」と題し以下のように述べている。

吾々が獨逸寫眞を見て如何んな感じが起こるであらうか一寸見た時には北國的な辛いそして固い感じが起こって親しみ難い様であります。仏蘭西や伊太利寫眞に馴らされた眼で獨逸寫眞を見ると淋しい様ないやな感じが起こつて来る然しそれを善く味ひそしてよく考へて見る時には仏蘭西や伊太利寫眞に見られない潑刺たる活気と目新しいそして材料の豊富なことを見るのである。獨逸といふ國は東より來る風が常に吹き一年中天氣のいい日が多いので寫眞を撮る上に正しい固い畫が出来る然し伊太利寫眞で見る様な南國的の強い明るみは全くないが此が又獨逸の劇に對する一の特色である。且各々の會社の撮影所は何れも最新式ですべての寫眞技術の斬新なる方法によつて行はれ、殊に撮影所の硝子の如きは常に多大の注意をはらひ、雪多き獨逸の冬に至れば硝子の下に蒸氣管を通じ雪による光線のさまたげを防いでいる。又人工光線の応用は色々地使用せられ其他科学上の技術は非常に進歩している。フィルム等は自國にても製造せられ、映写機の冠たるエルネマンは同じく獨逸のドレスデンにて製造されてゐる。斯くして獨逸は科学上に於て益々成功をおさめつつあるが劇として作られたるフィルムに於ても成功している。（中略）

斯くして獨逸の活動寫眞は總てが目下發展の途中にあるのではあるが現在の有様は上述の様で潑刺として新しい寧ろ何處かに凄い處を以てゐる位である。獨逸フィルムは決して靜ではない何處までも動的であるから將來の發展は實に恐るべきものであらうと豫想される。獨逸フィルムは現在に於ては製造力及技術の點に於て斯界の二流域は三流と云はれるのであるがその發展のすさまじい事は日に時にあらはれて行く、過ぐる半年に於けるビオスコップの努力の有様とフィルムの進歩は正に我國に輸入せられた作品を見ても明にその變化が證せられてゐる。末恐ろしき活動界は實に獨逸であることは言を待たない。¹²⁾

上記のJCA同人と小川は主にドイツ映画の芸術性に着目しているが、歸山はこれに加え、ドイツの産業技術の面からも広く分析しようとする視点を持つ。歸山は、ドイツの気候と映画製作の関係や自國でのフィルムや映写機の製造に触れて、それらを支えているものは目覚

ましく発展した科学力にあると認め、この時期のドイツ映画の躍進とこれらを連動して考えている。歸山の主張する全てのドイツの映画作品の隅々に充満しているという「潑刺」さは、ただ単にフランスやイタリアに席卷されている当時の日本の映画市場に新規参入してきたドイツの映画作品の目新しさのみ向けられているものではなく、その背景となる確固たる科学技術力を有し、それらが映画産業の基盤となっているドイツという国家そのものにも向けられている。

2点目は、1915年（大正4年）から翌1916年（大正5年）には大幅に減少している点である。さらに1918年（大正7年）には僅かな回復を見せるが1919年（大正8年）には封切となる作品は皆無となり、映画専門誌の誌面にも公開記録は確認できなかった。これらの原因は、主に1914年（大正3年）7月28日に勃発した第一次世界大戦にある。これに関連して、同年10月の『キネマ・レコード』第十六号（10月15日発行）は、雑誌の冒頭に麻生嘉一の「歐洲戦亂と倫敦市場」という記事を掲載している。これは、アメリカのバイオスコープ社が主にロンドンにあるヨーロッパの映画会社や代理店に対し、この戦争の商業上の影響を質問し、概ね各社は商業上の支障なしと回答した内容であった¹³⁾。しかし、この記事にはドイツの映画会社は含まれておらず、日本におけるドイツ映画の公開の継続の保証を確認できるようなものではない。これを補足するかのように『キネマ・レコード』同号には「おことわり」と題して以下のような文章が掲載されている。

この度の歐洲の大動亂はある種の物品の輸入を杜絶させました。そして航海の危険にともなつて高率な海上保険料や國定特別輸入税などの影響をうけて我がフィルム界は多少の餘波を被りました。それが爲め今までどうり完全に多くの需要を満たす事は非常に困難なのであります。淺草公園の各館に於ても其の一部だけに新フィルムを見出し其の他は可成再出して居ます。中には非常に古い映畫などがあつてタイトルもツレード、マークもないのもあります。出来るだけ私たちは調べて記載いたすつもりですけれども或はオミットする場合があるかも判りません。此の詛はれた戦争はいつ終る事でせう？早く平和になつて良いフィルムが見たいものです。¹⁴⁾（下線部引用者による）

この「ある種の物品」とは国名を明示しないものの、恐らくドイツ製の映画作品を示していると考えられる。両国は交戦中であり、おりしもこの月の末には中国大陸で山東省青島と膠州湾の攻略が開始されている。戦争開始の1914年（大正3年）7月から1915年（大正4年）までは、ドイツ映画の輸入や公開を禁止する各地方の勧告や命令の類が発せられたとの動きも、映画専門誌におけるドイツ映画排斥の動きも見当たらない¹⁵⁾。実際は、輸入の本数が減少し、そのため実際の公開に影響したと考えるのが妥当である。しかし、この輸入の問題は、日本とドイツの二国間の調整で解決されるような性質のものではない。一般的に映画の売買は上記の「倫敦市場」の仲介でなされることから、ドイツ国内はもとよりドイツとイギリス

の関係や主戦場であるヨーロッパの戦況が、諸国の映画産業においても相互に影響しているのであった。このような状況によって、この時期の日本におけるドイツ映画の公開は徐々に狭められていき、戦争終結のその翌年まで継続したと捉えられるだろう。

4. 2. 主な社会状況

	キリン館	みくに座	遊楽館	富士館	千代田館	帝國館	三友館	電氣館	
第一次世界大戦勃発 (1914年7月28日)	7月30日～8月10日? 冒険活劇『絶壁』/ 新派悲劇『姉妹』/ ライフトグラフ 「膠州湾の大海戦 青島落城の実況」?	7月22日～? 悲活 劇『ヘルダとアン ナ』出演「獨 逸人ハーバート 氏不思議の音 楽」他	×						
宣戦布告 英国⇒独逸 (1914年8月4日)			8月1日～15日 『日露大戦 争』(十周年記 念特別興行)	×	×	×	×	×	
宣戦布告 日本⇒独逸 (1914年8月23日)		×	8月16日～9月 上旬『鷗洲陸 海軍』(英獨の 大海戦)	8月11日～ 24日『伊士 大激戦』	8月10日～ 22日『佛國 復讐大戦 争』	8月11日～ 21日『日 露大戦 争』		8月20日～9月5日 『從軍』	
山東半島 龍口 先発隊上陸 (1914年9月1日～)	8月13日～休業	9月15日～23日? ウラルの鬼、新 派 歌船頭、 エレクトリック シーナリー「膠 州湾總攻撃」	9月11日～? 悲 劇『二人軍 曹』	9月中旬 ～? 勃牙利 土耳其『大 激戦』	×	8月22日～ 30日『開 戦前』(英 獨大海戦 フィルム)	8月25日～9 月上旬『佛 國大戦争』	8月30日 ～? 『此 の一戦』 (空中大戦 争)	×
		9月24日～10月14 日『膠州湾總攻 撃』『敵陣』(大 活劇、キ子マカ ラー)	×			8月31日～ 9月10日活 劇『フオ アヒズカ ントリー ズオノ ア』	9月11日 ～? 活劇 『交戦 國』	9月20日～10月3日 『英仏協商』/ 『軍吏と曹長』/ 『伯林入城』	
青島の戦い(1914年 10月31日～11月7 日)		10月15日～11月2 日『青島背面攻 撃』/『忠臣蔵』	10月15日～30 日『忠烈』(英 獨大戦)	×	10月25日～ 11月9日 『英佛露獨 塊 大戦 争』他	×	×	10月4日～20日? 『セダンの死守』 (佛獨戦争)他	
	青島陥落 (1914年11月7日)	×	×			11月11日 ～? 實寫 『青島攻 撃第二 報』他		10月21日?～30日? 『交戦の英佛白獨 塊』他	
								10月31日～11月10 日『アンソニーと クレオパトラ』	
								11月11日～22日 番外『歐洲戦報』 他/『ダントンの 末路』	

図2 第一次世界大戦開始から青島陥落時期の浅草常設館の公開内容

注) 『都新聞』1914年8月1日から11月17日までに常設館の宣伝に記載されている公開作品を抜粋して作成。太字は日本とドイツの戦いに関連する出し物、ニュース映画。「×」は不明を示す。

第一次世界大戦時、大日本帝国は日英同盟のもと連合国として参戦している。日本はドイツ帝国に対して、同年8月15日に最後通牒を突き付け、同月23日に宣戦布告を行っている。

9月にはドイツの植民地であった南洋諸島を占領し、11月7日に、山東省青島と膠州湾を攻略している¹⁶⁾。1919年(大正8年)6月28日に調印されたドイツに対する講和条約であるヴェルサイユ条約の締結を以って、この5年に及ぶ戦争が終結するが、この期間は図1のグラフが示す、ドイツ映画の公開数の減少時期とちょうど重なりこの長期に渡る戦争が文化状況においても深く影響を与えていると見られる。

この時期、外国映画の封切場の一つであった浅草六区の主要常設館においては、開戦と時期を同じにして社会情勢を反映して公開作品も戦争物が目立ち始める。この期間の浅草六区の主要常設館の戦争に関連する作品や出し物をまとめたものが上記の図2である。その内容として、欧州でのドイツとフランスの戦い、主に対ドイツ物が公開されており、特に関連がない戦争物も見受けられるが、戦争中の高揚感が示されている。この時期について、後年、当時はまだ駆け出しの活動写真弁士であった徳川夢声が出演中であったキリン館で対ドイツ戦の仮想実況を行ったことを自伝『夢声自伝(上)』に記している¹⁷⁾。

このような状況下加えて、ドイツのスパイを意味する「獨探」に関する記事が新聞に現れ始める。かつての日露戦争時のような過激な諜報関連の報道は確認できなかったが、休戦までの間、新聞には定期的に国内外における「獨探」の暗躍を告げる記事が掲載され、「獨探の仕業」として、注意喚起が示されていた。映画と「獨探」との関連は、『東京朝日新聞』1917年(大正6年)3月31日の「全米に排日活動寫眞▽獨探の仕業」という記事が挙げられる。内容としては、「獨探」がアメリカにおいて排日映画を展開させ、日米両国の友好を壊す工作を行っているとするものであった。¹⁸⁾

さらに、より具体的な被害として「民間商船被害」がある。1915年(大正4年)11月の山下汽船の靖國丸の撃沈報道を皮切りに、1918年(大正9年)10月日本郵船の平野丸の被害まで、日本の民間商船がドイツの潜水艦に攻撃され、撃沈させられたとの被害報道も新聞紙面を騒がせている。この商船被害は、休戦協定が締結される直前まで4年間にわたり、多くの民間商船に多大な損害を与えていくことになった¹⁹⁾。

このような社会状況にありながらも、この期間も日本国内の常設館においては、かつて「鉄血宰相」として知られたオットー・フォン・ビスマルク(Otto von Bismarck, 1815-1898)の立身出世物語である『ビスマルク一代記』(Bismarck, 1914)の公開禁止を除けば、目下「交戦国」であるドイツ映画が通常通り公開されており、映画専門誌ではドイツ映画の紹介や批評、宣伝広告が掲載されていた。

特に興味深いのは、1916年(大正5年)1月にドイツ・ビオグラフ社製作『イリヘルム・テル又は“瑞西独立史伝”』【245】が、芸術の殿堂であった帝国劇場で公開されていることである。帝国劇場は、日本初の西洋式劇場として1911年(明治44年)に開場し、日本における「近代化」を象徴する芸術文化施設として機能していた²⁰⁾。開場当初からオペラや歌舞伎、当時はまだ珍しかった新劇や女優劇、海外の著名芸術家を招いた各種演奏会、映画(活動写真)の公開などが幅広く行われており、洋画の大作の封切場所ともなっていた。この舞台上の上

演または上映は、「芸術」的にまたは「文化」的に認知された証であり、常設館での上映とは、例えば外国映画の封切を行えるような横浜や浅草の一流館での上映であったとしても、その規模や意味合いにおいて異なる性質を有していた。そのような場所で「交戦国」の当作品が公開されたのは驚くべきことである。

さらに、前節で示した「優秀フィルム番附」などにも特別にドイツ作品を排除する傾向は見当たらない。作品の紹介や批評に関していくつか例を挙げれば、『キネマ・レコード』第十九号（1915年1月10日発行）においては、佃紅琴という人物が「内外俳優録（第九回）」と題して、ヨセフ・デルモンド（Joseph Delmont, 1873-1935）とハンニ・ヴァイツセ（Hanni Weisse, 1892-1967）を紹介している。そこでは、デルモンドに関しては「獨逸活劇の達人」と評し、ヴァイツセに関しては、代表作である『鐘の鳴る時』【20】、『母の眼』【39】などを挙げ、その演技の確かさを認めている²⁰。また翌月号『キネマ・レコード』第二十号（1915年2月10日発行）においては、「活劇及びその俳優=其二=ブラウン探偵」と題し主演のルートヴィヒ・トラウトマン（Ludwig Trautmann, 1885-1957）を写真付きで彼とエルンスト・ライヒャー（Ernst Reicher, 1885-1936）、原作者のヨー・マイ（Joe May, 1880-1954）に関する特集が組まれている。このように、この時期は戦時中にもかかわらず、前年と公開数の減少は見られたが、興行や雑誌媒体においては、ドイツ作品は他の国のものと区別されることなく取扱われていたと分かる。

5. 代表的な作品と批評

5. 1. 『憲兵モエビウス』

この時期の公開作品の多くは喜劇であり、活劇、探偵物が多く公開され、特に後者は人気を得た。この状況を示すものとして、1915年（大正4年）の『活動寫真雑誌』第一巻第五号（1915年10月10日発行）に掲載された、京都の松鶴生という人物の「優秀フィルム番附」、『活動之世界』第一巻第四号（1916年4月発行）に掲載された、横浜の二代目木阿彌という人物の「優秀フィルム番附」には、『天馬』【69】、『伏魔殿』【201】、『名馬』【202】等の作品名を確認することができる。

また、『映画五十年史』においては、フランスが怪奇的な犯罪劇を製作したことに対比して、ドイツらしい探偵活劇を提供して人気を博したとの記述もある²²。しかし確かに、世間では活劇や探偵物が流行してはいたが、これとは別に映画専門誌が誌面を割き、高評価を与えたものは、主に「芸術」的傾向が評価された社会劇の形式を取る悲劇的要素の強い作品や技術的に優れた作品であった。それらには、これまで述べた『憲兵モエビウス』【35】の他に、『六月十三日（鐘の鳴る時）』【20】、『宿命物語』【27】、『テムプレーション』【43】、『國なき人（愛の叫び）』【67】、『プラークの大學生』【79】、『魔の指輪』【99】、『眞夏の夜の夢』【116】が挙げられる。特に、『憲兵モエビウス』はその代表的な作品であり、ドイツ映画に「芸術」的傾向を認めた初期の作品といえる。ここでは、『憲兵モエビウス』のあらすじを述べ、詳しい

批評を取り上げる。

『憲兵モエピウス』要約

憲兵モエピウスの娘スティーナは、恋人ローマンの子供を身籠っている。スティーナは父に打ち明けることなく出産するが子供は死産となる。一方ローマンは婚約者を作り結婚式を迎える。これに落胆したスティーナはローマンの自宅に放火する。憲兵である父モエピウスは娘を捕え彼は入水自殺をする。

この作品に関する記述は、前項で紹介したJCA同人の批評以外にも次の3点がある。

僕はその寫眞が期待した程よくなかつたのを一言するどーせと云へば少し悪く聞こへるがピントが合つてない點は獨逸式だピントが合つていないのはスティーナの顔—ルチエ、ホエフリツヒ嬢の目の凹んだ御婆アさん？らしい顔—を見て「ハゝア」と感付かされぬ様にしたものか。舞臺の顔はよくつても寫眞ではウンザリしてしまふ。フランツ、モレナー氏のモエピウスは鬢が悪い、室内と野外とは丸で違ふ人の様な感じがする悪口ばかり云つたが見ても損の無い映畫です、光線や室内や撮影法を見てはいけません俳優の藝と郊外の景色を御覽なさい。²³⁾

これは、JCA同人の批評が掲載された『フィルム・レコード』第四号（1913年11月24日発行）に、同時に発表されたオデオン座での公開における「竹雪子」という人物の批評である。この批評では、撮影技術に批判的な立場であるが、役者の演技や作中の景色には関心を向けている。

次いで、『キネマ・レコード』第十号（1914年4月10日）では、前項でも引用した小川誠耳が、「ルツィー、ホエフリツヒと『憲兵モエピウス_[ママ]』」と題し以下のように述べている。

『憲兵モエピウス_[ママ]』(Gendarme Moebius)といふ寫眞は或意味からいへば随分面白くない寫眞とも又非常に價值ある寫眞とも云へるものでした。若し單に通一篇に見過してしまつたならば諸君は必ず「西洋乃木大將」といふ様な感じしか起らないであらうが作者及出演者等に於て考へて見たならば此劇などは非常に價值ある作品である。作者は有名なフィクトル、ブリユートゲンで出演者は獨逸座のルツィー、ホエフリツヒ嬢(Frau.Lucei Hoeflich)王立劇場のゲオルグ、モレナール(Herr Georg Molenaar)等で劇の調子は極く質素な濫い北國的のものでした。(中略)斯くの如くして此フィルムは十分に價值を置かなくてはならないものであることは明である。極く眞面目な忠實な憲兵モエピウスが子の愛と世の義理との間に徨つて死に至る間は日本の武士道をそつくり露はした様なものであると云へませう。兎に角この劇はビオスコップ社が獨逸の藝術

品を撮る初めの試みの一つらしい所もある爲撮影などはあまり感心出来ないが此フィルムによつてルツィー、ホエフリツヒの藝を紹介することの出来たことを嬉ぶのです。²⁴⁾

『憲兵モエビウス』に対して小川は、上述の竹と同様に「撮影などはあまり感心出来ない」としているが、ドイツ一流の俳優を起用している点を挙げ、この作品を「非常に価値ある作品」としてその価値を認めている。また主人公の懊悩と死は日本の武士道に重なるとして親近感を示している。

また、1915年（大正4年）8月には、『活動寫眞雑誌』第一卷第三号（1915年8月10日発行）において、名古屋での公開を回想して杜の子という署名の人物が「憲兵モエビウス_{〔マモ〕}」と題して以下のように述べている。

最も新しい而して最も深い印象と云へば、彼のチーネス社の大作「アントニーとクレオパトラ」を挙げなければならないが、それよりも尚一層深刻なものとして僕の胸底にはビオスコップ社の「憲兵モエビウス」が潜んでゐる、この作品は慥か横濱のオデオンで封切りしたものであるが、僕が見たのはそれよりずつと遅れて漸く昨年の末當地の太陽館（西洋物専門）に於てゞあつた、其の當時世間の人々はこの一大雄篇を全く閑却してゐたので僕は腹立ち紛れに脱線頻々たるフィルム論を發表して散々観客の低級さを痛罵したが、大勢は如何ともなし難く遂に闇から闇へ無言の儘に葬り去られて了つた、しかし僕は該『憲兵モエビウス』一編が殆んど世間の一顧をさえも得なかつたとしても、飽くまで稀に見る傑作であると推賞するに憚らぬものである、撮影法は稍や舊套に墮してゐるかの憾みはあつたが、飽くまでも自然に人間の本来の姿を描き出したところに、不朽の価値を信じ得るのである、（中略）大體として筋を運ぶ上にも些かの無理がなく、徹頭徹尾自然を以て一貫してゐたので僕等は容易にモエビウス其の人の精神に同化して行くことも出来、燦然と降る血涙を汲み取ることも出来たのである、この寫眞は全長三千四百呎位なもので普通には儘受けのしない厄介物の悲劇として取り扱はれてゐたであらうが、僕等は尺數の程度や撮影技師の技巧の如何を鑑賞の標準とするものではない、作品に盛られた眞實性の如何である、彼の伊太利アムプロジオ社の喜劇が優良なのは、比較的眞實性が多分に含まれてゐる結果ではあるまいか、勿遮、憲兵モエビウス一編が實にゲルマン民族の血を以て彩られたる悲劇であり同時に最も偉大なる藝術的作品の一つであることは此の裏書に依つて明かであらうと思ふ²⁵⁾

杜の子は更に、モエビウスを演じたゲオルグ・モレナールの演技の巧妙さを指摘し、「極めて落着きのある、深刻な作品」と評している。杜の子はこの作品を「最も偉大なる藝術的作品の一つ」として非常に好意的に評価しているが、一方では、「其の當時世間の人々はこの一大雄篇を全く閑却してゐた」、「闇から闇へ無言の儘に葬り去られて了つた」様子から、

一般の観客は杜の子ほど関心を持っていなかったようである。杜の子は評価基準を「尺数の程度や撮影技師の技巧の如何を鑑賞の標準とするものではない、作品に盛られた眞實性の如何」としているが、これが杜の子と一般の観客の評価を異にした理由であると考えられる。

このように『憲兵モエビウス』の批評の中心は主に2点である。1点目は「ピントが合っていない」、「撮影法は稍や舊套に墮してゐる」、或いは明確に「撮影などはあまり感心出来ない」として指摘される撮影技術の古さや未熟さに対する批判である。2点目はそのような撮影法を補っても余りあるとする「作品に盛られた眞實性」、「俳優の藝」として示される真に迫る物語と出演者の演技に対する賞賛である。

この『憲兵モエビウス』に代表される悲劇的要素の強い作品群の登場は、主に活劇や探偵物の台頭が顕著であったこの時期のドイツ映画に、硬質で深刻な芸術作品としての印象を付与したと考えられる。現に、『憲兵モエビウス』の宣伝はその芸術性を強調する形になっており、公開された1913年(大正2年)から1915年(大正4年)まで、長期に渡り批評家達にその登場の衝撃と芸術性が話題にされている。また、この影響として小説家であった中内蝶二(1875-1937)はこの作品を当時戯曲化し、公開から4年後の1917年(大正6年)1月には井上正夫(1881-1950)の監督により『大尉の娘』として発表されている²⁶⁾。このような作品は全体的な公開本数から見れば特に多いわけではないが、この時期のドイツ映画への認識を形成する上では重要な作品であったと考えられる。

5. 2. 『どん底へ』

第一次世界大戦の勃発と長期化により、戦場となったヨーロッパ諸国の新作映画は輸入が滞り始めていった。これと入れ替わるかのように、アメリカ映画が本格的に日本映画界に流入し始め、従来の外国映画の勢力図が塗り替えられていく。『マスター・キー』(*The Master Key*, 1914)や『名金』(*The Broken Coin*, 1915)は1915年(大正4年)に公開された手に汗握る連続活劇を嚆矢として、また1916年(大正5年)『毒流』(*Shoes*, 1916)に代表される小市民の平凡な生活を描いたブルーバード映画が、チャーリー・チャップリン(Charles Chaplin, 1889-1977)やロスコー・アーバックル(Roscoe Conkling (Fatty) Arbuckle, 1887-1933年)のドタバタ喜劇シリーズが、様々なジャンルにおいて人気を得始める。

この時期のドイツ映画において、前節で取扱った『憲兵モエビウス』のように、話題性のある作品を見つけるのは困難であった。喜劇や活劇などの作品は多く公開されたが、単なる娯楽として消費され、映画専門誌で論じられるほどの内容のある作品は極めて少数であったようである。その中でも、ドイツ・ビオスコップ社の『どん底へ(誰が罪)』【223】は、出演者達の演技の確かさや芸術的傾向が高く評価されて、『活動寫眞雑誌』第一巻第五号(1915年10月10日発行)において、ゆたか一流星に次のように批評されている。

或る一部の人から非常な賞讃を得た映画がある。即ちどん底へと題するビオスコップ

社の藝術的悲劇であつて、獨逸の名優パウル・ウエゲナーが主演として全巻に其の比類なき技巧を漲らして居る。此の映畫は決して華やかな物では爲く又、大きな規模に依つて作られた物でも無い。背景や建道具は極く淋しいもので、矢鱈大仕掛けな活劇を喜び、はなやかな巴里の畫に酔ふて満足して居る人なら或ひは詰らぬ物と見過ごすかも知れぬが、さて一齣々々最新の注意を施して見ると實に何とも言へぬ妙技が漂つて居る。蓋し稀に見る傑作であらう。殊に最終のシーンに至つては殆んど何人も感動せずには居られぬ位同優の藝術的技巧が漲つて居るのである。

下らぬ活劇や男女の戀を描いた甘い物語の多い今日、僕が此の深刻な一編の悲劇に接し得たのは、ちやうど砂漠に於ける泉の感を與へられたに等しかつた。

此の映畫を賞讃された某君達は必らずや思はれたであらう。即ち其の映畫の眞の價値と言ふものは決して廣大な規模や、不可能事に等しき冒険等に依つて添えられるべき物でないと言ふことを……。要は精巧なる撮影術と然して其れに演ずるフオトプレイヤーの技巧の優劣の如何に依つてある。此の際ピオスコツプの映畫の優秀なのは、演者が著名の名優であることが一大原因するのである。僕はかゝる名畫の空しく地方常設館の一室に朽ち果てるかと、それを惜しみ此處に駄筆を連ねて其の略筋を附し、本誌の貴重な頁を汚した次第である²⁷⁾。(下線部引用者による)

ゆたか一流星の批評を説明する前に、あらすじを以下に簡単に述べる。パウル・ヴェゲナー演じる妻子持ちの腕のいい大工が、周囲に唆され酒に溺れるようになる。そのうちに、愛人を作るが騙されて刑務所に入る。出所後、職もなく物乞いをしていたがかつて捨てた妻子の姿を見て固く更生を誓う。しかし服役中に妻を見初めた男の策略により、再び酒に手を出し、作品名が示すように(英語原題はLed Astray(道に迷って、墮落して)、ドイツ語原題はDer Verführte(誘惑者))彼は、文字通り『どん底へ』落ちていく。

ゆたか一流星は、「下らぬ活劇や男女の戀を描いた甘い物語の多い今日、僕が此の深刻な一編の悲劇に接し得たのは、ちやうど砂漠に於ける泉の感を與へられたに等しかつた」として、本作品を傑作とみなしている。ゆたかがこの作品に見出したものは、巷を賑わしている冒険劇や恋愛劇とは一線を画す「精巧なる撮影術と然して其れに演ずるフオトプレイヤーの技巧の優劣の如何」を体現する主に主演のヴェゲナーの演技と物語自体の芸術性である。さらに、彼は「其の映畫の眞の價値と言ふものは決して廣大な規模や、不可能事に等しき冒険等に依つて添えられるべき物でない」と加え、流行している映画を批判しつつ、この作品を賞讃している。たしかにこの物語は現実離れした設定ではなく、むしろ普通の男がアルコール中毒に陥るといふ、現実に潜む「落とし穴」を主題として、悪意や貧困、抗いがたい欲望とその末の破滅を描いている。主人公が文字通り『どん底へ』と自らの意志で転落していく過程は、観客に、他人事ではない、「もう一つの人生」を想像させるであろうし、何よりも「生きる」ことの困難さを示している点がこのような評価に繋がったと考えられる。

おわりに

このように1913年(大正2年)から1919年(大正8年)までの日本におけるドイツ映画の状況を取り上げてきた。この期間にほぼ短編作品だったとはいえ、260作品が公開された。第一次世界大戦を契機に時代を分けて考えれば、戦前は映画専門誌や映画評論家は主に『憲兵モエビウス』、『どん底へ(誰が罪)』などの悲劇性を帯びた芸術映画を好んで取り上げ評価した。実際の映画館では、探偵活劇や喜劇が人気を博したが、前2作のように誌面で熱心に議論され、長く語り継がれる対象にはならなかったようである。戦後は、エルンスト・ルビッチ(Ernst Lubitsch 1892-1947)、F・W・ムルナウ(Friedrich Wilhelm Murnau, 1881-1931)、フリッツ・ラング(Friedrich Christian Anton "Fritz" Lang, 1890-1976)といった代表的な映画監督や、エミール・ヤニングス(Emil Jannings, 1884-1950)、ポーラ・ネグリ(Pola Negri, 1897-1987)などの個性俳優や、多様なジャンルの作品が出現する。その中で映画専門誌や映画評論家は、『カリガリ博士』や『最後の人』(*Der Letzte Mann*, 1924)、『ヴァリエテ』(*Variety Variete*, 1925)のような「不安」や「恐怖」が共通的な主題として示されている作品に関心を向けることになるが、各作品においても、日常的あるいは非日常的な世界の中で好んで描写されるのは、この期間に『憲兵モエビウス』、『どん底へ(誰が罪)』から見出された「深刻さ」であった。それらの主な主題が社会的な死や破滅に至る過程、免れない運命に屈することであったが、評論家達は、これらから芸術的要素を引き出し、盛んにその意義を論じ合い賞讃した。これは、これまで隆盛を極めていたイタリア映画やフランス映画が第一次世界大戦中の混乱で、その公開作品を減少させたのと入れ替わるようにして、アメリカ映画が急激に流入し、映画界を席卷しつつあった状況に過敏に反応したことも影響しているように思われる。「娯楽対芸術」に「アメリカ対ヨーロッパ」を重ね合わせて論じられる場合も決して少なくはなかった。これらの前提を踏まえても、ドイツ映画は、初期公開作品から、悲劇性や芸術性に秀でた作品として捉えられていたように考えることができる。あるいは、そうであるように期待されていたとも言える。これに加え、卓越した撮影技術や印象的な演出法、流行の芸術手法、「ただ生きること」の苦悩を主題としたことが、ドイツ映画への認識、さらには価値と地位を定めていったと考えられる。

(Endnotes)

- 1) 日本映画とドイツ映画の関わりについて論じている文献は次の2点が確認されるのみである。1点目は、映画史家の山本喜久男の『日本における外国映画の影響』である。そこでは表現主義的技法の模倣、重厚さの演出など日本映画におけるドイツ映画の影響が述べられている。『日本映画における外国映画の影響—比較映画史研究—』、早稲田大学出版部、1983年、124頁。2点目は、小川佐和子の『映画の胎動』である。小川はそこで、日本映画の近代化について、ドイツ映画を含むいくつかの外国映画からの影響について論じている。小川は、映像的技術の影響について、1916年に公開された『ゴーレム』(*The Golem*, 1915)が帰山教正

の『深山の乙女』(1919)に着想を与えたこと、また1914年に公開された『プラーグの大学生』で使用された二重露光技術、つまり1つの画面に複数の画像を合成させ写し込む技術が、歌舞伎を受け継いだ時代劇である旧劇作品で効果的に採用されたことを『四谷怪談』(1915)などの具体例を挙げて指摘している。『映画の胎動』, 人文書院, 2016年。281-282頁。

- 2) 田中純一郎『日本映画発達史 I』中公文庫, 1975年, 20頁。
- 3) 田中, 前掲書, 189-190頁。
- 4) この時期に、日本で公開された外国映画はヨーロッパ映画が中心であった。特に、1913年(大正2年)に、公開された『椿姫』(*La Dame aux amélias*, 1912)のように、フランス映画のアレクサンドル・デュマ・フィス(Alexandre Dumas fils, 1824-1895)原作の文芸物が多い。田中は、当時の知識階層が、ヨーロッパ映画を鑑賞する理由をこう述べている。「それが文芸映画として知られた原作であったり、音に聞くヨーロッパ名優の演技を觀賞したりする興味のために、これらの映画を觀賞した」田中, 前掲書, 247頁。
- 5) ザビーネ・ハーケ著, 山本佳樹訳『ドイツ映画』鳥影社, 2010年, 31頁。
- 6) 筈見恒夫の『映画五十年史』には、明治43年に福宝堂がドイツ・メステル映画『眼科医師』と『深山の蠟人(アルプスの蠟人)』を輸入したとの記述がある。本稿で参考とした『舶来キネマ作品辞典』では、確かにこの作品名は確認できたが、制作国名に「ドイツ」と記載されていなかった。そのため本稿では、この2作品を公開一覧表に取り上げなかった。『映画五十年史』創元社, 1951年, 65頁。
- 7) 世界映画史研究会『舶来キネマ作品辞典—日本で戦前に上映された外国映画一覧』科学書院, 2011年。
- 8) ハーケ, 前掲書, 27頁。
- 9) JCA同人『『憲モエビウス_(マ)』に就て』『フィルム・レコード』第四号, フィルム・レコード社, 1913年11月24日, 27-28頁。
- 10) 同上。
- 11) 小川誠耳「先年度の活動寫眞界雜感」『キネマ・レコード』第六号, キネマ・レコード社, 1914年1月1日, 8頁。
- 12) 歸山教正「獨逸フィルムの現在及將來」『キネマ・レコード』第十号, キネマ・レコード社, 1914年4月10日, 4-5頁。
- 13) 麻生嘉一「歐洲戰亂と倫敦市場」『キネマ・レコード』第十六号, キネマ・レコード社, 1914年10月15日, 3-4頁。
- 14) 「おことわり」, 同上, 33頁。
- 15) これに関連する動向として、横浜オデオン座の例がある。オデオン座は、当初ヨーロッパ商会のドイツ人貿易商リヒャルト・ヴェルダーマン(Richard Werdermann)の所有であった。戦争勃発の1914年に、交戦国のドイツ人という立場を考慮して、妻の弟の平尾栄太郎に経営を引き継いでいるが、興行は通常通り行われドイツ映画も公開されていた。
- 16) 田嶋信雄「東アジア国際関係の中の日独関係—外交と戦略」『日独関係史一八九〇—一九四五 I 総説 / 東アジアにおける邂逅』東京大学出版, 2008年, 16-17頁。
- 17) 徳川夢声の自伝『夢声自伝(上)』によれば、出し物ライフトグラフに「膠州湾の大海戦 青島落城の実況」舞台に池を作り、青島、膠州湾に人間軍艦を潜らせ戦わせ一風変わった

- 趣向であった。徳川夢声『夢声自伝（上）』講談社文庫，1978年，312-317頁。
- 18) 「全米に排日活動寫眞▽獨探の仕業」『東京朝日新聞』1917年3月31日付朝刊，2頁。
 - 19) 『神戸海運五十年史』神戸海運業組合，1923年，413-416頁。
 - 20) 嶺隆の『帝国劇場開幕』によると，帝国劇場の「西洋式」の推進は，劇場内外の建築のみに留まらず，実際の細々した観覧制度にも浸透したという。その結果，従来の富裕層と異なる，都市の近代化によって創出された「近代市民層」を新たな観客として取り込むことに成功したとされる。帝国劇場は，この「近代市民層」の文化的拠り所としても機能していた。嶺隆『帝国劇場開幕』中公新書，1996年，181-188頁。
 - 21) 佃紅琴「内外俳優録（第九回）」『キネマ・レコード』第十九号，キネマ・レコード社，1916年1月10日，14-15頁。
 - 22) さらに筈見は，印象深いものに『ブラウン探偵』物の『天馬』と『名馬』を挙げ，冒険劇の先駆をなすものであろうと指摘している。筈見，前掲書，68頁。
 - 23) 竹雪子「フィルム・レコード大正二年十一月下期」『フィルム・レコード』第四号，フィルム・レコード社，1913年11月24日，9頁。
 - 24) 小川誠耳「ルツィー，ホエフリッヒと『憲兵モエピウス』」『キネマ・レコード』第十号，キネマ・レコード社，1914年4月10日，17-18頁。
 - 25) 杜の子「憲兵モエピウス」『活動寫眞雜誌』第一卷第三号，1915年8月10日，天然色活動寫眞株式會社，27-29頁。
 - 26) 山本，前掲書，19頁。
 - 27) ゆたか一流星「獨逸ビオスコップ社作どん底へ」『活動寫眞雜誌』第一卷第五号，1915年10月10日，天然色活動寫眞株式會社，105頁。

【日本において公開されたドイツ映画作品一覧】

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
1	社会と舞台(虚栄)	The World and the Stage	社会悲劇	1913年	6月21日	横浜オデオン座	メステル
2	焔(炎)	×	悲劇	1913年	7月5日	みやこ座	ビオスコープ
3	マラツカ海峡	The Straits of Malacca	×	1913年	×	大勝館	ヴェルト
4	母	×	悲劇	1913年	7月25日	みやこ座	×
5	沈黙の戦士	A Dumb Hero	×	1913年	8月	×	ビオスコープ
6	夢か真か	×	探偵	1913年	8月5日	みやこ座	ビオスコープ
7	呪はれた女(親の罪)	The Sins of the Fathers	×	1913年	8月11日	横浜オデオン座	ビオスコープ
8	ハンナ嬢	×	×	1913年	8月22日	電気館	×
9	クレア嬢	The Minister's Daughter	×	1913年	9月	富士館	メステル
10	ブラウン大探偵	×	×	1913年	9月5日	みやこ座	×
11	みやげの葡萄酒(不思議な酒瓶)	The Wonderful Battle	喜劇	1913年	9月11日	横浜オデオン座	アイコ
12	ヨルダン	A Woman's Jordan	×	1913年	9月14日	常盤館	メステル
13	悪夢	Hot Blood	×	1913年	9月15日	みやこ座	ビオスコープ
14	ロルフ中尉	Laife a Ganie	×	1913年	9月15日	みやこ座	ヴィタスコープ
15	体操クラブ	Gymnastic Club	×	1913年	9月下旬	みやこ座	アイコ
16	元の空あみ(元の木阿弥/日曜日のプシー)	Pussy on his Holiday	喜劇	1913年	9月25日	みやこ座	コメット
17	扉(劇場火災)	The Theatre Fire	×	1913年	9月25日	みやこ座	メステル
18	マツクスの体力養成	Max and the Sandowstretcher	×	1913年	9月25日	みやこ座	コメット
19	エジプト風景	Kairouan.Only a holy City of Arabs in North-Africa	×	1913年	9月25日	みやこ座	アイコ
20	鐘の鳴る時(六月十三日)	When the Bells are Ringing	悲劇	1913年	10月1日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
21	確に學ひの寸法	Pussy Forget His Measure	×	1913年	10月11日	横浜オデオン座	コメット
22	兄弟(クラブの兵士)	The Knave of Clubs	悲劇	1913年	10月15日	みやこ座	ヴィタスコープ
23	苦肉の策	Father on the Spree	喜劇	1913年	10月15日	みやこ座	アイコ
24	催眠術博士	Professor Liliput	×	1913年	10月15日	みやこ座	オリンカ
25	硝子掃除	The New Windowcleaner	×	1913年	10月15日	みやこ座	コメット
26	女に忠告を与へた公爵(舞踏者より公爵夫人に)	From Dancer to Duchess	×	1913年	10月21日	横浜オデオン座	デー・カー・ゲー
27	宿命物語	Death and the Mother	×	1913年	10月25日	みやこ座	ビオスコープ
28	ハスバンド	Mr.Fips	×	1913年	10月25日	みやこ座	アイコ
29	秘密	Truth Will Out	×	1913年	10月25日	みやこ座	アイコ
30	ボイコット	The Baker and the Chimneysweep Looking out for a Sweetheart	×	1913年	10月25日	みやこ座	メステル
31	思う壺(女に服従)	The Female Attendance	喜劇	1913年	11月5日	みやこ座	アイコ
32	新聞王の娘(代々の辛苦/二十五年間)	Hereditary Burden	活劇	1913年	11月5日	みやこ座	アイコ
33	やかず聲(やかず嬢)	He is Not Jealous	喜劇	1913年	11月9日	錦輝館	アイコ
34	ズボンの間違ひ(ズボンの主)	The Changes Trousers	喜劇	1913年	11月中旬	キリン館	コメット
35	憲兵モエビウス	Gendarme Moebius	×	1913年	11月11日	横浜オデオン座	ビオスコープ
36	活動写真技師(写真技師採用)	Photograph Without Employment (Stage Maneger Max-Mack)	喜劇	1913年	11月14日	歌舞伎座	アイコ
37	グリーン・デヴェル	The Green Devil	悲劇	1913年	11月15日	みやこ座	ヴィタスコープ
38	主戦論者	The War Instigators in Embarraament	喜劇	1913年	11月15日	みやこ座	アイコ
39	ハンス嬢(母の眼)	Mother's Eyes	家庭劇	1913年	11月15日	電気館	ヴィタスコープ
40	石炭採探	In the Lemeithal-Stone Quarries	記録	1913年	11月25日	みやこ座	メステル

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
41	当意即妙(伯母サンの進物)	Aunt Hattie's Present	×	1913年	11月25日	みやこ座	コメット
42	三つ巴(しつべ返し)	Tit for Tit	喜劇	1913年	11月25日	みやこ座	コメット
43	テムプテーション	Night Butterfly	社会劇	1913年	11月25日	みやこ座	ビオスコープ
44	球戯界の商品(球戯会)	The Skittle Match	喜劇	1913年	11月30日	横浜オデオン座	アイコ
45	ヴイクチム(ピリテキム 上中下)	The Bridge of Life	悲劇	1913年	12月5日	みやこ座	ヴィタスコープ
46	新婚旅行	Adventurs on a Journey	×	1913年	12月5日	みやこ座	コメット
47	チエニス風景	Tunis	風景記録	1913年	12月5日	キリン館	メステル
48	地主	×	社会劇	1913年	12月5日	みやこ座	×
49	思ふ壺	An Artful Woman	喜劇	1913年	12月14日	キリン館	メステル
50	ゲルダーン	The Mysterious Club	活劇	1913年	12月14日	キリン館	アイコ
51	コンゴ国風俗	×	風俗記録	1913年	12月14日	キリン館	メステル
52	米國戦争余聞ペピタ(米西戦争奇談 ペピタ)	Pepita	×	1913年	12月15日	みやこ座	ビオスコープ
53	高圧電気	High Tension	正劇	1913年	12月15日	みやこ座	メステル
54	ザジヤ(怪美人)	×	×	1913年	12月20日	帝国館	メステル
55	故郷(死の主)	The Master of Death	悲劇	1913年	12月25日	みやこ座	ビオスコープ
56	復讐戦	He, who Laughs Last Best	喜劇	1913年	12月25日	みやこ座	アイコ
57	ブラウン探偵(前篇)	Men and Masks	×	1913年	12月25日	みやこ座	ヴィタスコープ
58	ローラスケート	Love and Rolling Skate	喜劇	1913年	12月25日	みやこ座	メステル
59	死の人	Oh, Peter-But this is Head Medal	×	1913年	12月25日	みやこ座	ビオスコープ
60	私の傘(拾った傘)	My Umbrella	喜劇	1913年	12月25日	みやこ座	メステル
61	心の閃(宝玉)	Blue-white Stone	活劇	1913年	12月31日	キリン館	インペラトル
62	何?	Demonyte(Dynamite)	×	1914年	1月上旬	帝国館	ノイエ
63	都と郷	In Town and Country	喜劇	1914年	1月上旬	帝国館	コメット
64	ブラウン探偵(後編)	Man and Mask-2nd Serise-	活劇	1914年	1月上旬	みやこ座	ヴィタスコープ
65	材木流し	Timber Drifting	記録	1914年	1月上旬	みやこ座	ヴェルト
66	洗濯女	The Washer Woman	喜劇	1914年	1月上旬	みやこ座	メステル
67	愛の叫び(国なき人)	No Native Land/Das Mädchen ohne Vaterland	×	1914年	1月11日	キリン館	アスターニールセンフィルム
68	ライオン楽師	The Bard's War in the Loin's Den	喜劇	1914年	1月中旬	みやこ座	ビオスコープ
69	天馬	The Million Mine	活劇	1914年	1月11日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
70	独逸軍人の乗馬練習	German Officer's Riding	記録	1914年	1月11日	キリン館	ヴェルト
71	覆面美人	The Honor of the Dead	活劇	1914年	1月11日	みやこ座	ルナ
72	天魔(ツエルノウスカ)	Czernowska of the Story of a Sin	活劇	1914年	1月15日	電気館	コンチネンタル
73	剛勇な妻君(僕の妻は大胆です)	My Wife is Courageous	喜劇	1914年	1月下旬	キリン館	インペラトル
74	子犬百種(子犬百種)	Puppies	記録	1914年	1月下旬	キリン館	ヴェルト
75	活動役者(考へ過ぎ)	Overhead	喜劇	1914年	1月下旬	キリン館	メステル
76	マックの天才!	Mac the Genius	嘲笑劇	1914年	1月下旬	帝国館	ウラヌス
77	ケリー探偵(ケリー名探偵)	Detective Kelly	喜劇	1914年	1月21日	みやこ座	メステル
78	呪ひの船(畸人倶楽部)	The Excentric Club	社会劇	1914年	1月26日	帝国館	ユニオン
79	プラーグの大学生	The Student of Prague (Der Student Von Prague)	×	1914年	1月30日	横浜オデオン座	ビオスコープ
80	白面鬼	The Circus Devil	現代劇	1914年	1月31日	みやこ座	デー・カー・ゲー
81	スミス夫人	A Good Remedy Tonicity	喜劇	1914年	2月上旬	みやこ座	アイコ
82	蛇島の飼育	An Ostrich Farm	記録	1914年	2月上旬	みやこ座	ヴェルト
83	氷の製造(氷は如何にして得るか)	Hou Ice is Obtained	記録	1914年	2月上旬	キリン館	ヴェルト
84	空中の秘密(恋に狂へる人)	Mad Love	悲劇	1914年	2月上旬	朝日館	メステル

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
85	ブッシーの煙突掃除の巻	Pussy as Chimney-Sweep	喜劇	1914年	2月上旬	朝日館	コメット
86	平和の子(小さな仲裁者)	A Little Peacemaker	正劇	1914年	2月上旬	キリン館	ビオスコープ
87	蓮華姫	Lotus, the Temple Dancer	×	1914年	2月1日	みやこ座	コンチネンタル
88	トンチンカン(妻君の紛失)	Luny has Lost His Wife	喜劇	1914年	2月1日	みやこ座	ルナ
89	六十九番地(マツサージ)	The Secret of the House No69	喜劇	1914年	2月中期	みやこ座	メステル
90	鬼探偵(黒十三結社)	The Black 13	活劇	1914年	2月11日	電気館	ヴィタスコープ
91	コンミッション	Hazard	×	1914年	2月11日	みやこ座	メステル
92	悲惨(雪の乙女)	The Maid of hthe Clouds	×	1914年	2月15日	三友館	ビオスコープ
93	血戦	That is War	×	1914年	2月18日	帝国館	コンチネンタル
94	猛火(褐色の獣)	The Brown Beast	×	1914年	2月19日	みやこ座	ヴィタスコープ
95	貸間有り	Furnished Rooms to Let (Mrs.Jones' Fourth Floor)	×	1914年	2月19日	みやこ座	コメット
96	三百年(アブダル・ローマンの財宝)	The Treasure of Abdar Rauman	×	1914年	2月19日	みやこ座	ビオスコープ
97	百万円	Not for 1,000,000	×	1914年	2月下旬	帝国館	ウラス
98	大西洋	A Night on the Atlantic	×	1914年	2月下旬	キリン館	ウラス
99	魔の指輪	The Ring that Binds	×	1914年	2月20日	横浜オデオン座	ビオスコープ
100	スパイダー組(旋風/大探偵ブラウン)	On the track of the Spider's League	活劇	1914年	2月28日	朝日館	ヴィタスコープ
101	怪鳥(飛行船で米国から欧羅巴まで)	From America to Europe by Airship	×	1914年	2月28日	帝国館	アイコ
102	学校からの娘	The Girl from School	×	1914年	×	×	ノイエ
103	愛と転職(彼の一番大切な患者)	His Most Important Case	×	1914年	3月上旬	朝日館	メステル
104	恋物語り(カスベルトの恋物語り)	Cuthbert's love Romance	×	1914年	3月上旬	キリン館	メステル
105	活動偽師	Film Fever	喜劇	1914年	3月上旬	みやこ座	コメット
106	真?不真?	Who Will Throw a Stone?	×	1914年	3月1日	みやこ座	インペラトル
107	集中射	The Baptism of Fire	×	1914年	3月1日	みやこ座	ノイエ
108	創痕(禍の傷痕)	The Fatal Scar	活劇	1914年	3月11日	キリン館	ルナ
109	舞踏タンゴ熱	Tango Spell	喜劇	1914年	3月11日	横浜オデオン座	ウラス
110	天女	×	冒険活劇	1914年	3月11日	又楽館	×
111	怪物(死したる客)	The Dead Guest	×	1914年	3月11日	みやこ座	ビオスコープ
112	火中のブラウン探偵(大探偵ブラウンと其の友/三つの記号/スコット探偵)	Three Symbols at the Crossing	活劇	1914年	3月11日	みやこ座	ヴィタスコープ
113	意外の銃撃	Luny Went Out Hunting	×	1914年	3月下旬	帝国館	ルナ
114	空中水雷	The Air Torpedo	×	1914年	3月下旬	帝国館	デー・カー・ゲー
115	女学校の教師	In the Girl's Boarding School	×	1914年	3月下旬	みやこ座	ウラス
116	真夏の夜の夢	A Midsummer Niggh's Dream	×	1914年	3月21日	横浜オデオン座	ビオスコープ
117	ペグー氏の雷返り飛行	A French Aviator Pegoud, Making His Looping the Loop Flight's	×	1914年	3月21日	横浜オデオン座	コンチネンタル
118	女見る可からず(男女の闘ひ)	Votes for Men	×	1914年	4月上旬	帝国館	ルナ
119	空中のブラウン(夜の影)	Shadows of the Night	活劇	1914年	4月上旬	みやこ座	コンチネンタル
120	アンゴ	×	活劇	1914年	4月8日	朝日館	コロニア
121	匈牙利ケルカの瀑布	Kerka, Falls Near Scandora	風景記録	1914年	4月11日	横浜オデオン座	ヴェルト
122	業業繁昌策(痛さ痒さ)	TheFrister Flitet	喜劇	1914年	4月11日	横浜オデオン座	ウラス
123	乱雲	The Lost Hair	活劇	1914年	4月24日	キリン館	メステル
124	雷光	For Another's Sin	活劇	1914年	4月25日	みやこ座	ルナ
125	怪猿	×	活劇	1914年	4月23日	朝日館	ヴィタスコープ
126	獨逸山中森林の伐採(獨逸森林の伐採/材木切出の實況)	Felling Timber in the Black Forest	記録	1914年	4月24日	横浜オデオン座	ヴェルト

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
127	銀世界(独逸冬の景色)	Winter Scene	風景記録	1914年	5月1日	横浜オデオン座	ヴェルト
128	鳥の生活	Pictures of Bird-Life	記録	1914年	5月中旬	帝国館	ヴェルト
129	黒き婚礼(恋無情)	The Black Wedding	正劇	1914年	5月10日	横浜オデオン座	イムペラトル
130	地下室(不思議の別荘)	The Mysterious Villa	×	1914年	5月14日	帝国館	コンチネンタル
131	独逸式運動法	German Gymnastics	教育	1914年	5月19日	横浜オデオン座	ヴェルト
132	新兵(湯風呂の中のルーニー)	Lunny in Bath	喜劇	1914年	5月下旬	帝国館	ルナ
133	アルプスの幽峡	Corges of the Valeis Alps	風景記録	1914年	5月30日	横浜オデオン座	ヴェルト
134	ニッセン(毒煙)	Evinrude	社会正劇	1914年	5月30日	横浜オデオン座	ピオスコープ
135	ルーニーの壁の塗替	Lunny Renovates His Ronns	×	1914年	6月上旬	キリン館	ルナ
136	自働船競争	Motor-boat Race	時事記録	1914年	6月10日	横浜オデオン座	ヴェルト
137	祖国	Tyrol in Arms	史劇	1914年	6月10日	横浜オデオン座	メステル
138	番地がもとで	The fatal house number or the lover in the lion's cage	喜劇	1914年	6月10日	横浜オデオン座	メステル
139	トロールハッテンの滝	From Gothenbrug to Trollhatten Falls	風景記録	1914年	6月中旬	キリン館	ヴェルト
140	レコード(騰上レコード)	His Record Flight	×	1914年	6月17日?	帝国館	コンチネンタル
141	続地下室(二人ドーソン大佐)	Capt.Dawson'sDouble	探偵	1914年	6月21日	帝国館	コンチネンタル
142	バンクの発見(新発見)	Bunke Discovers	喜劇	1914年	7月上旬	大勝館	コンチネンタル
143	現送者(タイム)	The Bank Messenger	活劇	1914年	7月上旬	キリン館	インペラトル
144	盗まれたる百万金(探偵王)	Stolen Millions	活劇	1914年	7月上旬	遊楽館	メステル
145	夜中の射撃	The Shot Midnight	悲劇	1914年	7月上旬	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
146	リスク(彼女の命を懸けて)	At the Risk of Her Life	活劇	1914年	7月1日	帝国館	ノイエ
147	チロルの風景	The dellartal in Tyrol	風景	1914年	7月1日	横浜オデオン座	ヴェルト
148	金剛	The devil's eye	活劇	1914年	7月中旬	キリン館	×
149	海水浴の賜物(海水浴の結果/さずかりもの)	Consequence of a swim in the sea by Nunky Danuky	喜劇	1914年	7月11日	横浜オデオン座	ウラヌス
150	独帝の宮殿と庭	A Summer Day in the Castle and Park of Sanssouci	風景記録	1914年	7月11日	横浜オデオン座	ヴェルト
151	第二天馬(犯罪/天馬続編)	A Dark Deed	探偵劇	1914年	7月14日	帝国館	メステル
152	人の心(コルシカ人マテオ・ファルコネ)	Metéo falconé the Corsican	史劇	1914年	7月下旬	帝国館	アイコ
153	赤蟻の生活常態	A Grimpse into the Life and Habits of the Red Ant	教育	1914年	7月21日	横浜オデオン座	ヴェルト
154	人か幽霊か	Man or Ghost	探偵活劇	1914年	7月30日	帝国館	コンチネンタル
155	艦上の水兵(水兵の一日)	Blue-jackets on Board-ship	時事記録	1914年	8月上旬	キリン館	ヴェルト
156	消滅の都(ゴリラ)	The City of the Disappeared	活劇	1914年	8月上旬	千代田館	インペラトル
157	海底のダイヤ(家宝の金剛石)	The Family Diamond	探偵活劇	1914年	8月1日	横浜オデオン座	メステル
158	神様のおイタ(トンミイと時計)	Tommy and the Watch	風景記録	1914年	8月1日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
159	バンクの壱等賞	Bunke Wins the Prize	喜劇	1914年	8月中旬	大勝館	コンチネンタル
160	コペンハーゲン	Copenhagen	風景記録	1914年	8月中旬	大勝館	ヴェルト
161	死活(斑の猟犬)	The Spotted Hound	活劇	1914年	8月11日	帝国館	ヴィタスコープ
162	黒猫(女の毒手に)	In a Woman's Grip	正劇	1914年	8月11日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
163	バンクの商売	Bunke's partnership	喜劇	1914年	8月下旬	大勝館	コンチネンタル
164	泥炭採掘の實況	How peat is obtained	教育	1914年	8月下旬	大勝館	ヴェルト
165	高山の水巖	Over Rock and Ice	風景記録	1914年	8月21日	横浜オデオン座	ヴェルト
166	傍に居た女(不幸な運命)	Fatal Fortune	悲劇	1914年	8月21日	横浜オデオン座	メステル
167	猟犬飼育法	A Pack of Hounds	教育	1914年	8月30日	横浜オデオン座	ヴェルト
168	〇〇〇(国際書信)	The Blue Letter	軍事活劇	1914年	8月30日	横浜オデオン座	ピオスコープ
169	辛い目(ヌネックの悶着)	Mr.Nuneck has troubles of his own	喜劇	1914年	8月30日	横浜オデオン座	ウラヌス
170	痛い御馳走	Tommy Gose to Birthday	滑稽	1914年	9月11日	横浜オデオン座	×
171	警察犬テル	Mine or yours	×	1914年	9月11日	横浜オデオン座	×
172	探偵王	×	活劇	1914年	9月15日	三友館	メステル
173	彼女の過ぎし秘密(女の一生)	The Secret of her Past	×	1914年	9月15日	帝国館	インペラトル

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
174	貴郎が悪い	Tommy Drivers His Own Car	×	1914年	9月11日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
175	トムミーの舟遊び	Tommy Sails Boats	喜劇	1914年	9月20日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
176	白墨(爆弾の戒公)	Dynamite Jack	探偵活劇	1914年	9月20日	帝国館	ヒーブッシュ
177	血路(ライベエン)	Lepain	探偵活劇	1914年	9月22日	大勝館	カールワイネル
178	失戀	×	人情悲劇	1914年	9月24日	日本座	メステル
179	敵陣(自由の曙光)	The Down of Freedom	×	1914年	9月25日	みくに座	メステル=ヘンニ ポルテンフィルム
180	牧師の娘	The Minister's Daughter	×	1914年	9月下旬	日本館	メステル
181	伯母をたづねたトムミー(トムミーと伯母)	Tommy on a Visit to His Aunt	喜劇	1914年	9月下旬	みくに座	ヴィタスコープ
182	素敵に痒いぞ(引掻いて下さい)	Scratch me Please	喜劇	1914年	10月1日	横浜オデオン座	ピオスコープ
183	腕なき人	The man without arms	悲劇	1914年	10月1日	横浜オデオン座	イムペラトル
184	欧洲時事画報(世界時事画報)	Eiko Woche	時事記録	1914年	10月11日	横浜オデオン座	アイコ
185	トムミー坊のいた(トムミーの植木屋)	Tommy as Gardener	喜劇	1914年	10月11日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
186	パナマの暴漢	The Desperado of Panama	活劇	1914年	10月11日	横浜オデオン座	ピオスコープ
187	ハクショー(ハリーの噴嚏)	Harry Can't Sneeze	喜劇	1914年	10月21日	横浜オデオン座	メステル
188	妾の理想は活動写真俳優(マックスと活動俳優)	How Uncle Max Became a Film Actor	喜劇	1914年	10月31日	横浜オデオン座	インペラトル
189	欧米時事画報	Eiko-woche	時事記録	1914年	11月上旬	大勝館	アイコ
190	多根(返る春まで)	Regained	×	1914年	11月中旬	大勝館	メステル
191	発明盗人	The Invention Stealers	探偵活劇	1914年	11月中旬	帝国館	デクロア
192	見捨てられたるジャック(故郷と他郷)	Home and Abroad	社会劇	1914年	11月11日	横浜オデオン座	デクロア
193	ライト(燈臺の秘密)	When the Light Went Out	活劇	1914年	11月15日	遊楽館	インペラトル
194	暴風雨(海軍少尉候補生の冒険)	The adventures of a Midshipman	冒険活劇	1914年	11月23日	電気館	ヴェルト
195	兄(復讐者/復讐)	The Avenger	×	1914年	12月1日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
196	大陸の無頼漢(黄色人の商売)	The Yellow Traffic	活劇	1914年	12月1日	横浜オデオン座	ブラッシュ
197	アイコ週報	Eiko-Woche	時事記録	1914年	12月下旬	横浜オデオン座	アイコ
198	欧洲時事画報	Eiko-Woche	実写	1914年	12月19日	横浜オデオン座	×
199	怪しき女	The Woman of Mystery	×	1914年	12月19日	横浜オデオン座	ブラッシュ
200	トムミーの運命(トムミーの運命の日)	Tommy's Fatal Day	喜劇	1914年	12月19日	横浜オデオン座	オリンカ(?)
201	伏魔殿(淋しき家)	The Lonely House	探偵	1915年	1月1日	電気館	コンチネタル
202	名馬(夜の影の秘密)	The Mysterious "Shades of Night"	活劇	1915年	1月1日	横浜オデオン座	コンチネタル
203	トムミーの運転手	Tommy Drives Car	喜劇	1915年	1月中旬	大勝館	ヴィタスコープ
204	ルニーの奇策(助けの神のルニー)	Luny as Saving Angel	喜劇	1915年	1月11日	横浜オデオン座	ルナ
205	トムミーの書き初め(画家のトムミー)	Tommy as Artist	喜劇	1915年	1月11日	横浜オデオン座	ヴィタスコープ
206	奪還(悪魔の爪に)	In the Devils Claws	活劇	1915年	1月11日	横浜オデオン座	アイコ
207	佛(瓜二つ)	Like two drops of water	悲劇	1915年	1月20日	横浜オデオン座	インペラトル
208	義務	Stern Duty	社会劇	1915年	1月30日	横浜オデオン座	×
209	秘密の村(火炎の風車)	Burning Mill	活劇	1915年	2月7日	横浜オデオン座	ゴットシャルト
210	女ブラウン(黒三人組)	The Black Tiro	探偵	1915年	2月18日	横浜オデオン座	アボロ
211	金色蝶	the Golden Fly	社会劇	1915年	2月18日	横浜オデオン座	ピオスコープ
212	パナマ運河	A Cruiser of the Panama Canal	記録	1915年	2月27日	横浜オデオン座	ピオスコープ

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
213	馬賊の巨魁(無智の王ルパン/ レーベン)	Lepain, the King of the Innocents	活劇	1915年	2月27日	横浜オデオン座	カールワイネル
214	王子と伯爵(誘拐)	Kidnapped	×	1915年	3月9日	横浜オデオン座	ビオスコープ
215	鉄壁(蜂起せる蛮人)	The Awakened Brute or Pushed to Despair	×	1915年	3月中旬	帝国館	アイコ
216	良心の呵責(宣告の瞬間)	Dogged by Conscience	探偵	1915年	3月下旬	富士館	ピオグラフ
217	流るゝまゝに(印度人の花嫁)	An Indian Bride	活劇	1915年	3月31日	横浜オデオン座	モノポール
218	続女ブラウン	The Modern Smuggler	活劇	1915年	3月31日	横浜オデオン座	アポロ
219	ルニーの誕生日	Lunny's Birthday	喜劇	1915年	3月31日	横浜オデオン座	ルナ
220	世渡りの闘ひ (女弁護士)	The Battle on the Way of Living	×	1915年	4月上旬	富士館	ヘンニーボルテン フィルム
221	活動写真の主脳歌劇女優 (女優の末路)	The Movies' Prima Donna	×	1915年	4月下旬	オペラ館	アスターニールセ ンフィルム
222	海と超人(海底鉄道)	The Railway Under the Ocean	×	1915年	5月15日	横浜オデオン座	イムペラトル
223	どん底へ(誰が罪)	Led Astray	正劇	1915年	5月29日	横浜オデオン座	ビオスコープ
224	図太い奴等(楽しき浮浪生活/ おやおや)	The Merry Vagrants	喜劇	1915年	5月29日	横浜オデオン座	コメット
225	七時間(白面鬼/姦悪と愛との 間に)	Between Villainy and Love	活劇	1915年	6月18日	横浜オデオン座	ビオスコープ
226	治療室(間一髪/黒石竹花)	The Black Carnation	探偵喜劇	1915年	7月3日	横浜オデオン座	ユニオン
227	カーソンの眼 (ジョージ・カーソンの光明)	The Light of George Carson	幻想劇	1915年	7月3日	横浜オデオン座	ビオスコープ
228	バスカビル(バスカーヴィルの 熊/青自動車)	The Bear of Baskerville	奇劇/活 劇	1915年	7月10日	横浜オデオン座	ユニオン
229	黒箱又はコブラ(社交界の賊)	Pirates of Society	探偵活劇	1915年	7月20日	横浜オデオン座	ルナ
230	マンヤ(土耳其の女マンヤ)	Manja, A Turkish Woman	探偵劇	1915年	8月18日	横浜オデオン座	ルナ
231	ビルバーン(暗夜の鏡/大した ダイヤモンド)	The Great Diamond	探偵	1915年	8月28日	横浜オデオン座	ユニオン
232	カドラ・サファ	Kadra Sâfa	宗教	1915年	9月8日	横浜オデオン座	ビオスコープ
233	三日間の死	Dead for 3days	探偵	1915年	9月18日	横浜オデオン座	ビオスコープ
234	猛炎(濁らぬ流れ)	The Disinherited	社会劇	1915年	10月下旬	みくに座	アイコ
235	君萬歳(十七号要岩/聖寿万 才)	Long Live the King	軍事活劇	1915年	11月10日	横浜オデオン座	コンチネタル
236	蛮犬	The Hound of the Abercrombies	活劇	1915年	11月20日	帝国館	ユニオン
237	ロラの家出した夜(ロラ/疑 問)	Lola	曲藝正劇	1915年	11月20日	横浜オデオン座	ルナ
238	コルソ城(コルソ城/晚かつ た)	Almost Too Late	探偵活劇	1915年	11月28日	帝国館	メステル
239	法廷の名優(誤審/怪幽魂)	Misjudged	悲正劇	1915年	11月30日	横浜オデオン座	ビオスコープ
240	火星の炎	The Flames of Mars	正劇	1915年	12月中旬	大勝館	ビオスコープ
241	妖犬(アパークロムビスの 猟犬の物語)	The Tale of the Hound of the Abercrombies	中古伝説	1915年	12月10日	横浜オデオン座	ユニオン
242	禁煙の苦(マリウスの禁煙苦)	Mauriuce Has Been Forbidden Smoke	喜劇	1915年	12月10日	横浜オデオン	メステル
243	ジョンと名刺と其友(罪の子/ 黄薔薇)	The Yellow Rose	北欧社会 劇	1915年	12月25日	横浜オデオン座	アイコ
244	暗号(曝露)	×	×	1915年	×	×	アポロ
245	イリヘルム・テル又は"瑞西 独立史伝"	Guillaume Tell ou "La Legende de la Libération de la Suisse"	×	1916年	1月26日	帝国劇場	ピオグラフ
246	隠証(暗室)	The Invisible Witness	×	1916年	4月下旬	みくに座	ビオスコープ
247	活人形(人形の家)	The Motor Girl	喜劇	1916年	4月下旬	帝国館	ビオスコープ

	公開作品	原題	ジャンル	封切年	封切日	封切場所	製作会社
248	大金鉱(ジャックスンヴイルの金鉱)	The Goldfield of jackson Ville	×	1916年	5月下旬	大勝館	ピオスコープ
249	妖怪ホテル	THE DEAD GUEST	×	1916年	5月20日	東京倶楽部	ピオスコープ
250	ゴーレム	The Golem	幻想劇	1916年	11月18日	横浜オデオン座	ピオスコープ
251	疑問	The Trick	×	1916年	12月	錦輝館	ルナ
252	呪の富	The Disappeared Lottery Ticket	活劇	1917年	1月5日	帝国館	ルナ
253	一人息子	His Only Son	社会劇	1917年	4月9日	活動之世界読者大会	ピオスコープ
254	戸なき家	The House Without Doors	幻想劇	1917年	7月10日	横浜オデオン座	ピオスコープ
255	世は無常	Driven Out	人情劇	1918年	1月21日	千代田館	ピオスコープ
256	水辺の群	The Gipsie's Kate	悲劇	1918年	1月25日	キネマ倶楽部	メステル
257	覆面の舞	Behind the Mask	人情劇	1918年	1月30日	遊楽館	メステル
258	金の籠	In The Gold Cage	喜劇	1918年	2月28日	オペラ館	メステル
259	少女の犠牲	A Girl's Sacrifice	悲劇	1918年	3月17日	電気館	ピオスコープ
260	怪しき扉	The Black League	活劇	1918年	×	千代田館	コンチネンタル